

## 大学生の自立意識に関する研究 —自立観、大人観の予備的検討—

大石 美佳 (家政保健学科・講師)  
松永しのぶ (昭和女子大学)  
伊藤嘉奈子 (子ども心理学科・講師)  
鈴木 公基 (家政保健学科・講師)  
前野 澄子 (初等教育学科・講師)

### 1. 問題と目的

近年、「ひきこもり」「フリーター」「パラサイトシングル」など自立しない若者の問題が注目を集め、多くの識者がこの問題について活発な議論を行っている(齊藤1998、山田1999、宮本2002、宮本2004、小杉2003、他)。

従来、「自立」は青年期に獲得されるべき重要な発達課題であるとされてきた。レヴィン(Lewin, K., 1939)は、青年期は、子どもから大人への移行の時期であり、この時期の青年を称して両集団の境に位置する境界人(marginal man)と呼んだ。第二次世界大戦後になると、エリクソン(Erikson, E.H., 1950)が『幼児期と社会』を著し、青年期を、大人社会に参加していくための準備期間であり、心理社会的モラトリアムと位置づけた。エリクソンは、この時期に達成すべき重要な課題を自我同一性(identity)の確立と考えた。

ハヴィガースト(Havighurst, R.J., 1953)は、生涯発達の視点から、青年期の発達課題を10項目あげており(Table1)、これらの発達課題の達成に成功することが次の成人期における課題の成功につながると考えた。これらの項目は、いずれも社会的にも心理的にも自立し、一人の大人として社会を担う一員となることを求めるものである。

Table1 ハヴィガーストによる青年期の発達課題

1. 同年齢の男女との洗練された新しい交際を学ぶこと
2. 男性として、または、女性としての社会的役割を学ぶこと
3. 自分の身体の構造を理解し、身体を有効に使うこと
4. 両親や他のおとなから情緒的に独立すること
5. 経済的な自立について自信をもつこと
6. 職業を選択し準備をすること
7. 結婚と家庭生活の準備をすること
8. 市民として必要な知識と態度を発達させること
9. 社会的に責任のある行動を求め、そしてそれをなすとげること
10. 行動の指針としての価値や倫理の体系を学ぶこと

(Havighurst, R.J., 1953 Human development and education.

[荘司雅子訳 1958 人間の発達と教育、牧書店] より)

その後、欧米や日本のような経済先進諸国においては、高度経済成長、高度情報化社会が急速に進展し、高等教育の大衆化もすすんだ。それに伴い、青年期が長期化し、大人社会への参

加が延期されていった。今日の青年は、豊かさと自由を享受できるようになり、そのことが逆に大人になることの意味を見出しにくくさせているとも言える。また青年が考える自立観、大人観にも変化が起こっていると考えられる。

青年期のモラトリアム現象に関しては、わが国でも1980年前後より指摘されてきた（小此木、1978）。しかし、従来の議論では、大人になることを先延ばしし、回避する青年の問題として、青年の「自立心の欠如」にその主な要因を求める傾向が強く、社会構造の変化という視点が薄いのが特徴であった。しかし宮本（2002）は、イギリスを始めとするヨーロッパ諸国における青年の自立に関する研究動向を踏まえた一連の研究から、「若者を自立させにくくさせている社会構造にこそ目を向け始めるべきである」と指摘している。また、イギリスの若者研究で成果をあげているジョーンズとウォーレス（Jones, G., & Wallace, C., 1992）は、分断的な青年研究や青年行政の悪弊を打破するためには、若者のニーズに対してより全体的に接近することが重要であると指摘し、若者の実態を知るためには、法規で規定した年齢による理解という方法を捨てて、彼らがどのようなプロセスを経て大人になろうとしているのかを正確に把握することが大切であると強調している。

われわれもこのような視点にたち、全体論的アプローチによる若者研究を目指している。われわれの目的は、心理・社会・教育学などの学際的視点から、青年から大人への移行期の自立意識の構造を明らかにし、自立を妨げている要因を心理的側面および社会構造の側面から分析することである。さらに、若者の自立を支援する教育プログラムを検討することも視野に入れている。本研究では、若者の自立意識の構造を明らかにするために、若者の自立観、大人観に関する先行研究を概観し、予備的検討として、大学生を対象に自立観、大人観を調査した。

## 2. 若者の自立観、大人観に関する先行研究

これまで心理学では、自立という概念を精神的自立、経済的自立（安定した収入）、社会的自立（結婚、年齢など）を含んだ概念として定義することが多かった（高坂、2003）。例えば、久世ら（1980）は、自立を身体的、行動的、精神的、経済的自立の4側面に分類し、上子（1982）は、このうちの経済的自立を行動的自立に含み、行動、決定、価値、情動の4側面から自立の概念化を行っている。これらの自立概念の再検討を行った渡邊（1991a、1991b、1992、1993、1994）は、自立の枠組みを情緒的、行動的、価値的、経済的、身体的、認知的側面の6側面から捉え、青年を対象に親子関係および性差との関連を検討した。渡邊（1995）は、これまでの自立観が男性中心に構築されてきたことから、生活身辺的な自立が軽視されてきたことを指摘し、自立の獲得には生活身辺的行動の自立も重要であるとしている。福島（1992、1993、1995、1997、1998、1999）は、渡邊の分類の情緒、価値、認知的自立の側面を他者との関係という視点から2つに分け直し、「精神的自立」（個の確立）と「社会的自立」（他者との関係の確立）の2側面に概念分類し、年齢による発達のプロセスや性差の検討を行っている。また、福島（1995、1998）は、成人の男女に「人間的に自立している人はどのような人だと思うか」と自由記述による回答を求め、成人の自立観が「経済的側面」、「生活身辺的側面」、「精神的側面」、「社会・対人的側面」に4つに大きく分けられることを示した。一方、高坂ら（2003）は、青年期の心理的自立という側面だけに絞り、その枠組みを行動、価値、情緒、認知の4側面から検討している。このように心理学の分野では、自立の概念を多側面からとらえようとする研究が多く行われてきているが、ハヴィガーストの発達課題の中に見られるような市民的自立に関する側面の検討

は乏しいように思われる。

一方、前述した青年期の長期化以外に、平均寿命の伸び、ライフコースの多様化などの社会人口学的変化は、大人になることの標準的なマイルストーンの消滅をもたらした。その結果、大人になることの判断基準が曖昧になり、「大人になること」「自立すること」は個人の主観的な感覚の問題として捉えられる傾向が強まっている。コート (Cote, J.E., 2000) は、成人期が社会的地位 (社会的・制度的指標) の取得というより、心理的状态となっていることに着目し「大人であることは、社会的過程というより、心理学的過程になりつつある」と述べ、心理学的成人期とよんでいる。このように大人になることが社会的役割や制度的地位から切り離された個人の問題としてとらえられる傾向が強まれば強まるほど、若者は結果として自分探しに長い期間を費やすことになり、そのことが逆説的に若者の自立を困難にさせている要因の1つになっているとも言えよう。

2000年以降、フリーターやニートの増加が社会的問題としてクローズアップされ、自立のための生活条件を手に入れられない若者が増加したことへの関心が高まってきた。その結果、心理学以外の領域でも若者の自立に関する調査、研究が多く行われるようになった (小杉2002、2003、宮本2002、宮本2004、他)。労働政策研究・研修機構では、様々な角度から若年雇用政策について意欲的な研究を行っている (労働政策研究・研修機構、2004、他)。2004年度の社会政策学会においても、「若者－長期化する移行期と社会政策－」というテーマが共通論題としてとりあげられている (社会政策学会、2005)。また若者が対象として本格的に取り上げられることの少なかった『生活経営学研究』でも2002年に若者の自立をテーマに特集が組まれ、労働経済学、住居学、家族関係学、消費経済学などの立場から複眼的な議論を展開している (日本家政学会生活経営学部会、2002)。この特集において宮本 (2002) は、若者の自立について、現代の変動する社会経済環境のなかで、そもそも「大人になること」の意味が変貌していることから、「『一人前』とはどういう条件を満たした状態なのか、また成人の地位とは何を指すのか、それが暦年齢とどのような関係をもつのか」という問題は、現代社会が直面する重要なテーマである」と述べ、現在必要なことは、成人期への移行がどのように変化しつつあるかを正確に把握する作業を行うことである、と若者研究の課題を的確に指摘している。この問題については、福島 (1992) も、「自立すること」は、“大人になる”ための発達の一側面として重要視されることであるが、大人になることの判断基準が曖昧である今日、自立の概念も曖昧なままに使用されているのが現状である、と同様の指摘をしている。

このような一連の研究成果を踏まえ、われわれは、青年から大人への移行期に着目し、移行期に自意識がどのように変化していくのかを実証的に明らかにしていくため、まず、大学生を対象に「自立するということ (自立観)」と「大人になるということ (大人観)」という2つの概念について調査することにした。

### 3. 自立観、大人観に関する調査

#### (1) 調査概要

##### 1) 調査協力者、調査時期および調査方法

首都圏の女子大学2校の大学生、大学院生42名に無記名の質問紙調査を2005年10月に実施した。42名のうち年齢が30歳以上だった2名を除いた40名を分析の対象とした。調査協力者の属性をTable2に示す。

Table2 調査協力者の属性

									人数 (%)
学年	3年生 5 (12.5)	4年生 28 (70.0)	修士1年生 7 (17.5)						40 (100)
年齢	20歳 1 (2.5)	21歳 9 (22.5)	22歳 22 (55.0)	23歳 4 (10.0)	24歳 1 (2.5)	26歳 1 (2.5)	27歳 1 (2.5)	28歳 1 (2.5)	
居住形態	親と同居 27 (67.5)	一人暮らし 11 (27.5)	その他 2 (5.0)						

## 2) 調査内容

質問紙は自立観を問う項目と大人観を問う項目からなっている。自立観については、「自立するとはどういうことだと思うか（以下、自立観という）」を自由記述でたずね、「自分がどのくらい自立していると思うか（以下、自立自己評価という）」の程度を4件法でたずねた。さらに自立自己評価についてはその理由を自由記述で回答してもらった。

大人観については、「大人になるとはどういうことだと思うか（以下、大人観という）」（自由記述）と「何歳からが大人だと思うか（以下、大人になる想定年齢という）」をたずねた。さらに「自分を大人だと思うか（以下、大人自己評価という）」と「早く大人になりたいと思うか（以下、大人願望という）」の程度を4件法でたずね、それぞれの理由を自由記述で回答してもらった。

## (2) 結果と考察

### 1) 自立観

まず自立観についてみてみよう。Table3は、自立観の自由記述をまとめたものである。自立観について、最も多くみられたのは「自分で稼ぐ」という経済的な自立についての記述であった。大学生にとっての自立のイメージは、「親に頼らず、経済的に一人でやっていけるようになること」であるようだ。大学卒業後の就職、ひいては就職のための就職活動が、大学生の自立意識の形成に重要な意味をもつといえる。また「精神的に人に頼らない」「自分で物事を判断し、責任を持つ」という心理的自立、「自分で食事・洗濯をする」という生活的自立、「社会の中に入れていけること」という社会的自立についての記述がみられた。また「親元を離れて生活する」「親と自分とを同一視しない」「家族とのよい関係を維持する」など親との関係に焦点をあてた記述が多いのも特徴的であった。以上の結果から、大学生は、自立を経済的・心理的・社会的・生活的自立という複合的な概念としてとらえてはいるが、経済的自立が最も強く意識されていることがわかった。

自立自己評価では、「とても自立している」と回答したものは一人もおらず、9割の学生が自立していないと自己評価している (Table4)。その理由は「学費・生活費を出してもらい、生活身辺的なことも親に頼っているから」のようである。

Table3 自立観

ID	自己評価	自立とは	b)		居住形態
			学年	年齢	
4	2	お金の面でも精神的な面でも親などの保護者がいなくても自分一人でやっていくことができること	4	22	親と同居
24	2	精神的にも経済的にも親に頼らないこと	3	21	一人暮らし
25	2	自分で食事、洗濯などをする	3	21	夫、子と同居
29	2	物事を自分で考えて決め、行動する	4	22	一人暮らし
1	3	精神的、経済的にも人に頼らずに自分で責任を持つこと	4	22	一人暮らし
2	3	経済的、精神的な面において、判断力を持ち、自己決定しながら自分の力で生活できること	4	26	親と同居
3	3	自分で生計をたてる、親元を離れて生活する、親の世話をする、仕事で一人前になる、家庭を守る	4	22	一人暮らし
6	3	責任を負うこと、人に依存せず、自分で前に進もうと努力すること	4	22	親と同居
7	3	自分のことは自分で全て行い、家計を一人で行えること	4	21	親と同居
8	3	経済面で一人で生活できること、人の稼ぎをあてにしないということ	4	22	親と同居
12	3	自己責任で、自分の生活を自分で管理すること	4	22	親と同居
14	3	社会に出てお金を稼ぎそのお金で生活していくこと、その状態をずっと保っていくことができること	4	22	一人暮らし
16	3	自分で仕事を一人前にして生活をしっかりと管理する、お金の面で両親に頼らない、でも家族ともよい関係を維持できる	4	22	一人暮らし
18	3	自分自身でお金を稼いで生活力があること	4	22	親と同居
20	3	精神的、金銭的に一人で生活できるようになること	4	22	親と同居
21	3	自分で生活基盤を築いて成り立たせること	4	22	親と同居
26	3	親と自分を同一視しない、経済的にも気持ち的にも親に依存せず自分は自分と考えること	3	21	親戚宅に下宿
28	3	収入や家事などの面で、親に頼らずに自分の力で生活していく	4	22	親と同居
30	3	大人になる、ひとりだちする	4	21	一人暮らし
31	3	経済的にひとりでやっていけること、責任が取れること	4	22	親と同居
33	3	自分の働いたお金だけで生活すること	4	21	親と同居
36	3	自分の責任において生活するようになること、依存するのではなく対個人として親と接することができること	M1	28	一人暮らし
38	3	支えられて生きているということを深く知り、気づき、自分も積極的に他人を支えたり支えられたりを実感しながら生きていくこと、他人への感謝を忘れないこと	M1	22	親と同居
39	3	親からの自立、経済的、精神的自立に伴って、自分自身で物事を判断し責任をもって行動すること	M1	23	親と同居
5	4	自分で稼ぎ、責任を負うこと	4	21	一人暮らし
9	4	自分で稼ぎ、その稼いだお金をやりくりしながら生活できる、親に頼らない	4	27	親と同居
10	4	自分のスタンスを持っているということ、自分で生活していけるということ、社会の中に入っていけるということ	4	21	親と同居
11	4	自分の稼ぎできちんと生活(料理や洗濯もそこそこなし、向上心をもって生きている)していること	4	22	親と同居
13	4	まわりの人に頼らず、自分でできることは全てすること、精神的にも強くならなくてはならない	4	22	一人暮らし
15	4	実家暮らしであっても身の周りのことが自分できちんとできる、また家を出て仕事をしていること、一人で物事を決断できること、それに責任がとれること	4	22	親と同居
17	4	一人暮らしをして親の援助は受けない	4	22	親と同居
19	4	自分で稼いでやりくりして心身共に健康的に暮らせること、親などに頼らない	4	22	親と同居
22	4	わからない	4	22	親と同居
23	4	自分で働き、稼ぎ、親に頼らなくても生活できる	3	21	親と同居
27	4	精神的に人に頼ることなく、様々な問題を自ら解決し、経済的にも安定していること	3	20	親と同居
32	4	大人になるということ	4	23	親と同居
34	4	自分の生活にかかるお金を自分で作れること、一人暮らし、あるいは新しい家族と家庭を持ち暮らすこと	M1	22	親と同居
37	4	人の助けを借りながらも生きていく上で最低限度のことは一人でできるようになること	M1	23	親と同居
41	4	自分の給料で自分の生活をまかなえること、親とある程度人間対人間の対等な関係になれること	M2	24	親と同居
42	4	生活面(家事、親戚づきあい)、経済面(生活費、保険料など)で親、周囲の親戚に頼ることなく一人前に行くこと	M2	23	親と同居

a) 1 とても自立している、2 まあ自立している、3 あまり自立していない、4 まったく自立していない

b) M1 大学院修士1年生、M2大学院修士2年生

Table4 自立自己評価

	人数(%)		
	全体	学部生	大学院生
とても自立している	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
まあ自立している	4(10.0)	4(12.1)	0(0.0)
あまり自立していない	20(50.0)	17(51.5)	3(42.9)
まったく自立していない	16(40.0)	12(36.4)	4(57.1)
合計	40(100.0)	33(100.0)	7(100.0)

## 2) 大人観

つぎに大人観についてみる。Table5は調査協力者の大人観をまとめたものである。ここから、今回の調査協力者の大学生たちは、大人になるということを「経済的自立」「精神的自立」「責任」「自己管理」というキーワードにみられるように「自立すること」ととらえていることがわかる。また「成人・20歳」「仕事・就職」「親になる・子育て」のようなライフイベントでとらえている者もいた。社会との関係について、「社会の役に立つ」「人を受け入れる」など、周囲への関心や協調も大人の条件と考えられているようだ。

大人になる想定年齢については、最も多いのは23歳で、30歳、20歳と続いている (Table6)。23歳は新卒の就職年齢、20歳は成人年齢ということだろう。また昨今の若者を対象とした施策は概ね30歳までを対象としているが、今回の調査結果からも、現在では大人になる年齢として30歳が1つの目安となっていることがうかがえた。

自身の大人自己評価はあまり高くなく、「あまりそう思わない」「そう思わない」をあわせると、75%が自分自身を大人だとは思っていないという結果であった (Table7)。その理由は「(経済的にも身辺的にも) 親に面倒をみてもらっているから」というものが最も多かった。

Table6 大人になる想定年齢

	人数(%)		
	全体	学部生	大学院生
18歳	2(5.0)	2(6.0)	
19歳	1(2.5)	1(3.0)	
20歳	6(15.0)	6(18.2)	
21歳	3(7.5)	2(6.0)	1(14.3)
22歳	3(7.5)	3(9.0)	
23歳	9(22.5)	8(24.2)	1(14.3)
25歳	3(7.5)	3(9.0)	
27歳	2(5.0)	2(6.0)	
29歳	1(2.5)	1(3.0)	
30歳	8(20.0)	3(9.0)	5(71.4)
その他	2(5.0)	2(6.0)	
合計	40(100.0)	33(100.0)	7(100.0)

Table7 大人自己評価

	人数(%)		
	全体	学部生	大学院生
とてもそう思う	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
まあそう思う	10(25.0)	9(27.3)	1(14.3)
あまりそう思わない	18(45.0)	15(45.5)	3(42.9)
まったくそう思わない	12(30.0)	9(27.3)	3(42.9)
合計	40(100.0)	33(100.0)	7(100.0)

Table8 大人願望

	人数(%)		
	全体	学部生	大学院生
とてもそう思う	8(12.5)	5(15.2)	3(42.9)
まあそう思う	21(52.5)	17(51.5)	4(57.1)
あまりそう思わない	11(27.5)	11(33.3)	0(0.0)
まったくそう思わない	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
合計	40(100.0)	33(100.0)	7(100.0)

Table5 大人観

ID	自己評価	想定年齢	大人とは	a)		居住形態
				学年	年齢	
1	2	20	精神的にも経済的にも自分で責任を持って生活できること、自立できるように努力していこうと強い意志、行動すること	4	22	一人暮らし
2	2	20	責任をもつこと	4	26	親と同居
3	2	25	歳をかさねる、自立する、親の世話をするようになる、就職する、子育てをする、経験をつむ	4	22	一人暮らし
4	2	21	自分一人の力で自分の身の回りのことができ、人にできる限り依存せずに自分の力で生きていくことができること、社会に対し自分の力で対応していくことができること	4	22	親と同居
21	2	19	周りの影響だけでなく、自分の中での意志がはっきりしてくること、自分の意志や行動に関して責任を持つこと	4	22	親と同居
24	2	20	成人になること、自分自身で意志決定すること	3	21	一人暮らし
25	2	20	自分で生活していくこと	3	21	夫、子と同居
29	2	23	精神的に自立すること	4	22	一人暮らし
33	2	25	親から自立していくこと	4	21	親と同居
38	2	21	精神的に成熟して、社会的な行動が取れること、周りとの協調性がとれ、自分が安定していること	M1	22	親と同居
6	3	21	自分のことだけでなく周囲のことを常に考えることができ、適切な判断ができること、最低限、身の回りのことは自立して行っていくこと、自分の言動に責任を持つこと	4	22	親と同居
7	3	23	親から自立し、一人で家庭のやりくりを行い、自己責任で行っていくこと	4	21	親と同居
8	3		自己管理ができること(生活面・健康面・経済面など)	4	22	親と同居
12	3	27	自分の稼いだお金で生活をし、金銭的にも家事などの日常生活的にも安定して自立できている人、自分の生活だけでなく、家族に気を配れる人	4	22	親と同居
14	3	22	自分で考えて行動したりできること、社会的に一人前になること、自分の力で生活できること、今の日本(社会)などを考えることができること	4	22	一人暮らし
15	3	18	自分の行動に責任をもてるようになること、お金の面でも自分でまかなえるようになり、未来を予測しながら行動できること	4	22	親と同居
16	3	30	社会人になってある程度仕事が自分でできるようになる時自分自身が親になった時のどちらか	4	22	一人暮らし
17	3	23	責任をとる、自立	4	22	親と同居
18	3	20	自分自身ですべての行動に責任をもてること、自分の考えや意見をもって言えること	4	22	親と同居
20	3	18	親元で生活している中でも意識的に自立していくこと、さまざまな経験をし、身につけていくこと、自分にも周りにも余裕を持っていること	4	22	親と同居
27	3	23	周囲のこと等を視野に入れて利己的にならず良くも悪くも体裁を整えた人のこと	3	20	親と同居
28	3	23	自立すること	4	22	親と同居
30	3	25	経済的、心理的に自立すること、一人で生きていけること	4	21	一人暮らし
31	3	23	自分の行動、また身近な人(身内など)の行った行動に責任をもつこと	4	22	親と同居
32	3	20	自分の生活すべてに責任を負えるようになること、道徳的な判断力、社会から求められている行動を取るなど精神面以外にも、経済的に一人でやっていけるようになること	4	23	親と同居
34	3	30	自分で稼いだお金で生活できること、自分のことを最低限やれること、自分の欠点と長所を知っていること	M1	22	親と同居
36	3	30	親を思いやれるようになること、経済的に自立すること、自分のすずむ道を見つけそれに向かい責任をもって行動できること	M1	28	一人暮らし
39	3	23	経済的自立、精神的に安定、自分で物事を決める、責任をもつ	M1	23	親と同居
5	4	22	自立、マナーを身につけること、社会の役に立つこと	4	21	一人暮らし
9	4	30	人間としての最低限のマナーを身につけ(してはいけない事、して良い事の区別がちゃんとできる)自分が生きていくための基盤を作る、またまわりの事にも目を向けられるようになること	4	27	親と同居
10	4	29	経済面や精神面で自立していること、自分で稼ぐ事ができ、一通りの生活を営んでいけること、他人も自分もきちんと受け入れることが出来ること	4	21	親と同居
11	4	23	自立していること。自分で働き、その稼ぎできちんと生きている人を大人だと思う。	4	22	親と同居
13	4	30	何に対しても自分で自立すること。そして働いて社会に貢献すること	4	22	一人暮らし
19	4		自分で稼いで生きていけること、いろいろなことを経験して心に余裕ができること、自分の意思はしっかりもつが、周りをみてうまく主張できること	4	22	親と同居
22	4	22	仕事をしていること	4	22	親と同居
23	4	23	20歳を越えること、経済的に自立すること、自分の意志を持つこと	3	21	親と同居
26	4	27	自分で自分が暮らしていけるお金を稼ぎ、自立して自分の言動に責任を持つこと	3	21	親戚宅に下宿
37	4	30	精神的にも経済的にも自立していて、自分らしさをもっていること	M1	23	親と同居
41	4	30	精神的、経済的にある程度自立すること、自分の行動に自分で責任を持つこと	M2	24	親と同居
42	4	30	生活面、経済面において自立すること	M2	23	親と同居

a) M1 大学院修士1年生、M2大学院修士2年生

では大学生は、早く大人になりたいと思っているのだろうか。大人願望の程度は、全体でみても「とてもそう思う」「まあそう思う」をあわせ、そう思うと回答した者が6割強、大学院生では全員がそう思うと回答している (Table 8)。理由としては「親に迷惑をかけたくない」という回答が多い。また「早く大人になりたいというよりもならなくてははいけないと思う」という回答もみられ、大学生は早く大人にならなくてはという思いが意外に強いことが分かった。一方、大人になりたいと思わないと回答した者の理由をしてみると、「大人というより学生でいたいから」「子どもの方が気が楽だと思う」というように大人になることを回避する回答や、「中身の無い大人にはなりたくないから」という回答にみられるように自立することが自己内面的なことになっていることをうかがわせる記述もみられた。

このように「大人になること」=「自立すること」という考えが多くみられ、“大人になる”ための一側面として、彼女たち自身も「自立すること」を重要視していることがうかがえた。

### 3) 自立観と大人観との関連性について

「大人自己評価」「自立自己評価」「大人願望」それぞれの関係をみた (Table 9、10、11)。その結果、「大人自己評価」と「自立自己評価」との間に正の相関がみられ ( $r=.762$ ,  $P<.01$ )、前述したように、大人になることと自立することと同様の意味合いでとらえられていることが示唆された。

Table 9 大人願望と大人自己評価との関連

		人数(%)			
大人願望		とてもそう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない
大人自己評価	とてもそう思う	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	まあそう思う	2(5.0)	3(13.3)	5(12.5)	0(0.0)
	あまりそう思わない	6(15.0)	10(25.0)	2(5.0)	0(0.0)
	まったくそう思わない	0(0.0)	8(20.0)	4(10.0)	0(0.0)

Table 10 自立自己評価と大人自己評価との関連

		人数(%)			
自立自己評価		とても自立している	まあ自立している	あまり自立していない	まったく自立していない
大人自己評価	とてもそう思う	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	まあそう思う	0(0.0)	4(10.0)	6(15.0)	0(0.0)
	あまりそう思わない	0(0.0)	0(0.0)	13(32.5)	5(12.5)
	まったくそう思わない	0(0.0)	0(0.0)	1(2.5)	11(27.5)

Table 11 大人願望と自己自立評価との関連

		人数(%)			
大人願望		とてもそう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない
自立自己評価	とても自立している	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	まあ自立している	0(0.0)	1(2.5)	3(13.3)	0(0.0)
	あまり自立していない	6(15.0)	9(22.5)	5(12.5)	0(0.0)
	まったく自立していない	2(5.0)	11(27.5)	3(13.3)	0(0.0)



#### 4. まとめと今後の課題

本研究では、大学生の自立観、大人観を探るため、女子大学生を対象として質問紙調査を行った。その結果、大学生の自立観は主として経済的自立に重きがおかれていることが示唆され、大人観は「自立すること」であった。しかし、ほとんどの大学生は、経済的に自立した存在ではないため、自身を大人ではない、自立していないと感じている者が多いという結果になったのだろう。では、大学を卒業して就職し、経済力を身につければ、若者は、「大人になった」「自立した」と実感できるのだろうか。どうもそうではないように思われる。本論でも繰り返し述べたように、大人になるプロセスは現代社会ではより複雑化・曖昧化していると思われるからである。

今後は、男子大学生を対象として同じ調査を行い、女子大学生の自立観、大人観との相違点を検討したい。また本研究で得られた知見をもとに、自立を「経済的自立」「心理的自立（個人的・対人的・自己認識）」「社会的自立」「生活身辺的自立」「親からの自立」の5側面からとらえた自立尺度を作成し、量的調査を実施することにより、若者の大人観、自立観、自立の実態、大人になるプロセスを明らかにしていくことを検討している。

本研究は、鎌倉女子大学学術研究所助成研究「『青年から大人への移行期』の自立意識と自立を支援する教育プログラムに関する研究」の平成17年度中間報告である。

#### 引用文献

- Cote, J. E. 2000 Arrested Adulthood, New York University Press
- Erikson, E.H. 1950 Childhood and society .W.W.Norton (仁科弥生訳1977, 1980 幼児期と社会1, 2 みすず書房)
- 福島朋子1992 思春期から成人にわたる心理的自立ー自立尺度の作成及び性差の検討ー 発達研究 8 pp.67-87
- 福島朋子1993 自立に関する概念的考察ー青年・成人及び女性を中心としてー 発達研究 9 pp.73-85
- 福島朋子1995 自立をめぐってーその特質と葛藤 現代のエスプリ「女性の発達」 331 pp.93-102
- 福島朋子1997 成人における自立観ー概念構成と性差・年齢差 仙台白百合女子大学紀要 創刊号 pp.15-26
- 福島朋子1998 人間的自立に関する探索的研究ー40代・50代既婚者の調査からー 仙台白百合女子大学紀要 2 pp.105-115
- 福島朋子1999 既婚成人のもつ自立達成みについてのー考察 仙台白百合女子大学紀要 3 pp.9-21
- Havighurst,R.J. 1953 Human development and education, Longmans Green (荘司雅子訳 1958 人間の発達と教育 牧書店)
- Jones,G. & Walles, C. 1992 Youth, Family and Citizenship, Open University Press (宮本みち子監訳 1996 若者はなぜ大人になれないのか：家族・国家・シティズンシップ 新評論)
- 上子武次1982 親は子どもの自立心を育てているか 児童心理 36(1) pp.55-65
- 香山リカ2004 就職がこわい 講談社
- 高坂康雄、戸田弘二2003 青年期における心理的自立 (I) ー「心理的自立」概念の検討ー 北海道教育大学附属教育実践総合センター紀要 3 pp.135-144
- 小杉礼子2002 自由の代償 労働研究機構

- 小杉礼子2003 フリーターという生き方 頸草書房
- 久世敏雄、久世妙子、長田雅喜1980 自立心を育てる 有斐閣
- Lewin,K.1939 Field theory in social science. Haper&Brothers. (猪股佐登留訳1956 社会科学における場の理論 誠信書房)
- 宮本みち子2002 若者が《社会的弱者》に転落する 洋泉社
- 宮本みち子2004 ポスト青年期と親子戦略 頸草書房
- 日本家政学会生活経営学部会2002 特集 若者期の生活経営—依存から自律へ— 生活経営学研究 37 pp.1-44
- 小此木啓吾1978 モラトリアム人間の時代 中央公論社
- 労働政策研究・研修機構2004 移行期の危機にある若者の実像—無業・フリーターの若者へのインタビュー調査(中間報告)— 労働政策研究報告書6
- 斉藤環1998 社会的ひきこもり PHP出版
- 社会政策学会編 2005 若者—長期化する移行期と社会政策— 社会政策学会誌13 法律文化社
- 渡邊恵子1991a 自立の概念化の試み 日本女子大学紀要人間社会学部 創刊号 pp.189-206
- 渡邊恵子1991b 自立と自己の性の受容—女子大学生の場合— 日本女子大学紀要人間社会学部 2 pp.83-95
- 渡邊恵子1992 自立と自己の性の受容(2)—性差の検討— 日本女子大学紀要人間社会学部 3 pp.1-14.
- 渡邊恵子1993 自立と自己の性の受容(3)—性差・発達差の検討— 日本女子大学紀要人間社会学部 4 pp.261-275
- 渡邊恵子1994 青年期の自立と親子関係 日本女子大学紀要人間社会学部 5 pp.305-304.
- 渡邊恵子、平塚知恵1997 大学生の自立の行動・意識・意欲—自宅通学と自宅外通学の比較— 人間研究 33 pp.13-12
- 渡邊恵子1995 自立再考—女性の自立・男性の自立— 柏木恵子、高橋恵子編著 発達心理学とフェミニズム ミネルヴァ書房 pp.77-101
- 山田昌弘1999 パラサイト・シングルの時代 筑摩書房